

街を行く

第40回 知覧 Chiran

魂が揺さぶられます

やっと念願が叶い、鹿児島を知覧への訪問が実現しました。知覧と言えば、誰もがまず思い浮かぶのは「特攻隊」。彼らをどの様な言葉で表現したらよいのでしょうか？ これまで映画やドラマで観たり、靖国神社や海軍兵学校のあった江田島の記念館などを訪れたり、折をみてその足跡に触れてきてはいました。しかし、実際の前線基地であったここは少し趣が異なります。特攻平和会館を訪ねると、「英霊」や「国の為の犠牲」などの彼らを表す言葉を軽々しく口に出せなくなり、特攻隊とは何だったのかという問いが、未だ終わっていないことをハッキリ実感しました。

出撃していった彼ら隊員の中に、まだ少年の面影を残す二十歳に満たない若者が多いことに驚きました。わが子とだぶらせて考えると何ともやるせない気持ちになるとともに、当時の戦争指導者への怒りが腹の底からこみ上げてきます。もう一つの驚きは、したためられた遺書。母や家族、愛おしい人に宛てられたそれは、今の目からすれば本当に若者が書いたのか疑いたくなるほど見事な文面で教養の質の高さに目を見張ります。彼らが生きて戦後の復興を担ってくれていれば、と残念でなりませんでした。

さて今回は、知覧を通して歴史のメモリアム（記念館）を観光名所とした街のあり方について考えていきます。地方にとって街の生き残り策は、街の顔をどうつくるかです。その顔のひとつが観光名所となります。観光名所には二つの要素あり、一つは自然、もう一つは歴史です。う



知覧の市街地と桜島



特攻隊員たちが足繁く通ったという「富屋食堂」

ち歴史には、遺跡や寺社、城など今に残る歴史を眺め古に想いを馳せるためのものと、知覧のように後世に残したい記録を施設にとどめ確認するためのものがあります。前者は歴史的建造物そのものが残る城などが良い例で、建物を見ることを通じ当時の武家社会のあり方やその地ならではの殿様の生活様式が伝わって来ます。しかしそれが後者となると少し様子が違います。記念館などで展示されているテーマが来場者の心に響くかにかかっています。その意味で、知覧の街のテーマは興味が有るか無いかにかかわらず魂を揺さぶります。われわれが新しい歴史を刻むうえで避けて通れないものです。知覧は何の変哲もない地方の小さな街ですが、その街おこしは、ただ集客のためではなく、お伊勢参りと同じく日本人としての心の巡礼であるのかもしれない。ボストンにあるケネディの生家が国立公園の管理下に置かれているよう

に、ここも国立公園の一つであってもおかしくはありません。何故か歴史建造物崇拝はあるのですが歴史的な街の崇拝は有りません。有形ではなく無形も街には大きな財産なのです。地方都市を救うのはその街の歴史に畏敬の念をもち、それをどう発信していくかが重要なのですね。

南 一弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役役に就任。2006年株式会社ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。

BLOG「南一弘の負けない不動産投資」
http://blog.livedoor.jp/minami_kazuhiro